

# 「ツップ」世界遺産

# 千恵新聞

## 観光者教育を軸 無形遺産では初

ユネスコの評価機関は八日未明、一般社団法人CHIE-NO-WA福田千恵子代表の活動により浸透が進むツーリストツップ(通称ツップ)による観光者教育の普及が、観光を基盤とした融合型の先端的街づくりを国と地域が進める上で、ツップを無形文化遺産に登録することが適当との勧告を出し、ツップを世界遺産にする



ツップを伝える福田代表(上)。教育機関への授業も展開(右)。世界遺産となっても原点は忘れない。

## ツップの街づくり 抜本改革を期待

文科省

今回の発表を受け、羽生文科相は会見を開き、「一連綿と受け継がれてきたツーリストツップのメインが、文化遺産という側面でもって、地域社会や世界全体の活力向上と生活環境の抜本的改善につながることを期待する」とのコメントを出した。過去、伝統工芸や建築士匠、祭事など、過去から語り継がれる無形遺産は数多あったが、未来にバクを見せた無形遺産は例を現ない。それだけ昨今の地球規模の問題、とりわけ観光課題による街の荒廃が、何ら改善に向かわない実情を踏まえて無形遺産に詳しい郷土大学大学院教授の三ヶ木永劫教授は

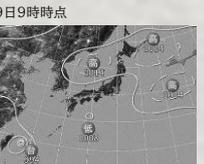
## 「千恵の遺産」は解散

「金を失うのは小さく、名誉を失うのは大きい。しかし、勇気を失うことはすべてを失う。」第二次世界大戦中にイギリスで首相を務めたウィンストン・チャーチル氏のこの格言が、時代を超えて、私たちが直面している環境問題、人権問題もまだまだ山積状態、そしてコロナ禍を経験した私たちの持続可能な社会は、未だ分断型社会構造を脱却できず、経済活動にも大きな影を落としている。様々な場面で試され続けた私たちが、ここ近年で失ったものは何なのか。いまだ体裁だ

2027年(令和九年)10月9日(土)

今日の紙面  
企業の2割がAI経営者 3  
低炭素目標下方修正 6  
台風25号沖繩に接近 9  
奇禍「現金のない社会で」10  
小説「千恵の向こうに」12

お天気図



## 千恵のコラム『世界の課題山積に、ツップが一石を投じるとき』

「この季節、迷いますよね。ホットかアイスか。」指定された取材場所はホテルのラウンジでも洒落たカフェでもなく、あふれた児童公園のベンチだった。自販機の前で力なくさ迷う指と、あのツップ啓蒙を成し遂げた決断力のギャップに今更ながら戸惑う▼コロナ禍になる一年前の今日、彼女は社団法人を立ち上げた。観光を変えたい、地域を活性化させたい。その想いは決して単純ではなかった。大使館に足を運び、行政を動かした。観光庁へ声を上げた。流入人口重視の観光業界の在り方を変えるべく、この七年間で足しげく通った距離は地球を三周するに至った▼「混雑とゴミ。観光の問題はこの二つに凡そ集約されます。」わかりやすい説明が好評で、教育機関にも幾度となく講演してきた。しかし本質はもっと複雑で巨大だった。観光者教育は子どもも達だめでなく、大人たちの固まった枠組みを変えようとした。この地球の美しさをいかに守るのか、という問いが、思っても見えていた。大きく静かな、そして堂々とした決意に嘘はない。世界が動くわけである。

ひとりが尊敬をもって生きる社会が、ツーリストツップから起り出す。未来は明るい。再来年には、G7すべての国で、この観光者教育がカリキュラム化される。観光という文化が、ツーリストツップというブランドが、やがて世界を変えていく。この崇高なミッションはないものがあがる。欠かせないものはすべてを失う。この言葉に尽きる。勇気を、取り組み成功の最重要指標であることは間違いない。もはや、待たない。



2020年12月には、94か国の大使館に感謝しギフトを贈った

「千恵探偵事務所  
まずは「相談」を」  
今、幾重にも繰り返されてきた歴史のワンシーンに、千恵の遺産が刻まれた。世界遺産という枠組みを超えて、未来の道は険しい。世界も、共にそれぞ

series 特集  
観光論(1)

「文千番記者」